中二病女と腑抜けな男

帝国皇帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中二病女と腑抜けな男

【Ｎコード】
Ｎ９９２２Ｘ

【作者名】
帝国皇帝

【あらすじ】
荒スジである。特に意味はありません…ごめんなさい（笑）

出くわしの一日…。（前書き）

変な本のある本屋、『岸本書店』でいつも店番をする主人公は、中二病少女と出会い…。

出くわしの一日…。

「あー、疲れたぁ」

こう愚痴を言っても変わらないのは知っている。俺は、岸川書店の息子たる岸川港（きしかわみなと）１６歳。１ヶ月前に入学して高校は行ってるけどはっきり行って特に何も無い。

「港。早く本どけ！店開けるから。」

こう言うのは親父、岸川書店の店主岸川健夫だ。うちはこの通り本屋をやってるが…あまり繁盛してない。置いてあるのは出てくる時代でも間違えたかのような内容不明な革の分厚い本や、研究書、小説だの漫画だの雑誌だのは隅っこのほうに棚一つ申し訳程度しかない。

「ねえ、もう小説バンバン売らない？まったく意味不明な本あってもしょうもないじゃん。」

「馬鹿もんが。本に失礼だろが！」

「って言ったってね～…。」

親父は頑固だ。だからこそここにある古い本が十何年も生き永らえているのである。だけどもこの商売にならない本をいつまでも置いている理由はあるらしい…。けど何も言わない。と言うか覚えてないんだと思う。

「商売上がったりじゃ店閉めるしかないよ。」

「…うるさいわ。」

今度は頭を殴られた…。まあ仕方ない。

俺はいつもの問答を終えた後、いつもどおりの坂道を駆け下り学校へ向かった。はっきり言って友達は無いに等しい…。たまにノート見せてくれないかと尋ねられること以外席の隣人とも話したことは無い。頑張ってこの高校に入ったはいいが、特に何も面白いこともなく、店のレジ打ちのため部活にも入ってい無い。俺の家は大通りの坂道沿いにあるレンガ造りの本屋である。ちなみに言うと、本

屋の一部は親父の趣味でカフェになっている。高校はこれまた坂を下りてすぐの角を曲がった先にあるせいかかなり近い。ものの2・3分で着くと、二階の昇降口から3階へと上がる。クラスは1―4。三階のせいか、桜の匂いが鼻をつく。いつものように窓際中ごろの自分の席に座り、チャイムを待つ。クラスは喧騒に包まれている。聞いても特もない話だ、聞く必要がない。中学時代、俺はほかの友達の家より少し遠かったため、高校は皆と離れてしまった。なんてことを思い出す…。リア充だったあの頃は。チャイムが鳴り、みんな席に着く。まもなく教室のドアが開かれ担任が入ってきた。名前は…、三宅高次（みやけたつぐ）だったか。あまり人の名前を覚えるのは得意ではない。

「起立、気をつけ…礼」

あれは確か学級委員の小池だ。下の名前…そんなのは知らない。

「おはよう、今日の授業に特に変更はない、みんなしっかりと授業を受けるように。」

それだけだ。この担任には教師特有のらしさがない。時々この人は本当に教師なのかと疑いたくもなる。まあ、話の短いことに悪いことは無い。はて1時間目は何だったか…。あ、数学か。特に問題なし。と思って席に座り直そうとしたとき…

「えぇー抜き打ちテスト！？」

一人の声で、クラスの空気が春にもかかわらず凍りつく…。

「「「「「「「「「「えぇぇぇぇぇぇぇ～」」」」」」」」」」

そう、凍りつき、音を立て砕けた。抜き打ちか。流石抜き打ちだ。苦笑いをするしかない俺だった。

案の定テストは散々で、自分がこんなにも頭が悪いのかと呪いたくなった。まあ、どの道本屋を継ぐ俺にはあまり関係のない話だが…転職するときに…と、珍しく親父がまともな事を言ったから行っているだけ。クラスの皆も散々だったらしく、どんよりしていた。一日の授業も終わり、鞄を持って教室を出る。階段を降り、昇降口

を出て正門を出る。朝と同じ道を行き、店にもどる。相変わらずガラガラ…。鞄を二階に置いてレジに入って入荷した本を少し読む。汚さず、跡を付けず、慎重に…。どれからどれだけ時間が過ぎたのか、文庫本の半分を読んでいると滅多に拝めない客の姿があった。まずうちの店は万引きはない。万引きしても意味ないものが手前にあるからだ。その客は奥の本棚まで行ってうろちょろしていた。そう、明らかに挙動不審。

「まさか、なあ…。」

まあ、一応声を掛けてみよう…。だが何故だろう。全身が「こいつと関わるな！」と警報を鳴らしている。黒い長髪の後姿、ん？よく見ればこいつ…うちの学校の生…徒じゃないか？

「君…な、何してるの？」

「っ！あ、あなたはっ！っく…追手か…。」

「は？」

全くもって意味不明である。追手？さっぱりだ…。

「な、なんでもない！」

頬を赤らめる少女、あぁ、こいつ中二病入ってるな。そして盛大に鞄で本棚の本をふっ飛ばしつつ走って店外へ…。しかしすぐ店内に戻ってきた。若干濡れて…。ん？と思って空を見遣ると土砂降っていた。あーこいつ帰れないのか。なんてことを考えて、仕方がないからタオルを持って声を掛けに行く。

「はい。災難だったな。」

「うぐ…。あなた誰なの？その制服…同じ学校っぽいけど…。」

落ち着いたのか普通に喋る少女。黒い長髪に整った顔立ちの少女は、三笠木葉（みかさこのは）と言う。彼女は１―６だから全く関わりがなく、双方知らなかったのだ。ココじゃ狭いなと思って、ある程度広いカフェの方へ案内する。

「へぇ…あなたのうちはカフェまでやってるの？じゃ、おいしいコーヒーでも貰おうかしら…。あ、もちろんブラックね。」

「はいはい、１４０円ね。」

「あら、高いのね。」
「一応豆は好い物だ。それでも高い言うなら…。」
「言うなら？」
挑戦的な視線を向けてくる。
「はぁ…。いいよ、一杯だけおごるよ…。傘すら置いてないからな…ここ。」
「あら優しいのね。それとも女に甘いだけ？」
なんだこいつ…さっきっから態度がガンガン変わってるぞ！？
「雨上がったら帰れよ。」
聞いてないという風にコーヒーを啜る。そう、とても幸せそうに。
はぁ、あと二時間は上がらないだろうな…雨。

全くだ…。

結局…。その一

結局…、雨は止まずにかれこれ二時間も土砂降っている。まだ降らし足らないのか、いっこうに収まる気配が無い。

「やまねーな…雨。」

「…」

コーヒー二杯も奢らせた挙句、商品を立ち読みをして時間を潰すという暴挙に出た三笠木葉は、最初に小説内の登場人物にキレ始め、本棚に激震が襲うようになったためハリセンでひっぱたいて“静かにさせた”ところだ。まあ、こうして静かにしてくれるのは大変よろしいことだと思っていたら、今度は急にぶっ倒れたではないか。

「おい、何寝てんだよ。」

「お…なか…が…へった…の」

「うげっ…。」

こ…こえ～。夢見心地でそんな声出されるともっとこえ～！！！！！！！うちの冷蔵庫には酒のつまみ（※モチのロンで親父の。）と…。あと何も無かった～。餓死りそうなコイツを放置すんのもなんだしということで近くのスーパーのタイムセールまで残り五分なのを確認し、傘も邪魔なので差さずに猛ダッシュでスーパーへ出かけた。しばらく運動してないからか、脚が重いような気がする。一応タイムセール二分前に到着し、かごを持って近くの商品棚を適当に漁る。説明すると、このスーパーはタイムセールス中にレジを通ればなんと五十パーセント引きというシステムだから先に準備をして並ぶのが一番効率的。とりあえず、ネギと鳥もも肉、レタスやトマト、きゅうり。そういえばドレッシング切れてたと思って塩ダレのドレッシングを買い物かごに入れてレジに並ぶ。一番少ないところへ。

「ふう、この人数なら…。」

とりあえず、馬鹿みたいに買い物かごをいっぱいにしている人も

居ない。タイムセールが始まりさっさかレジを終え、店を出る。相変わらずの土砂降りには滅入るけどまたまた走って家まで帰った。
「ただいま。おーい、親父ぃ、夕飯どうすん？」
「いらん。」
まあ、酒のつまみもあるし、親父は勝手にやってくれるだろう。
「しゃーない。作るか。」
くたばってる三笠に健康食品の「Ｊｏｙ・Ｚｏｙ」を食べさせてから、二階のキッチンに駆け上がる。そういえば、もう八時近い。妹の奈帆ももういい加減に引きこもり図書室から帰ってくるだろう。そんな事を思いながら手っ取り早くネギと鳥もも肉を塩コショウで炒める。この手抜き料理は、スーパーの惣菜から発案された究極の早飯。レタス、トマト、きゅうりも適当にぶった切って皿に盛って…。こうして、ものの五分でみるみるうちに出来上がった夕飯をテーブルに置く。
「お～い、出来たぞ。」
「いいにお～い。上がっていいの？」
「どうしてもって言うならだ。」
「じゃっ、遠慮なくっ。」
二階に駆け上がるその軽やかな足取り。つい数分前に恐ろしい声を吐き、くたばっていた人間とは到底思えない。思えるわけない。
「わー、あなたって料理もできるの？」
とても手抜き料理だとは言えないこの喜び様…。若干引きつった感じで目をきょろきょろさせてたら、丁度妹が帰ってきた。
「ただいま～。ん、この良い匂いは…！！」
そう、いい匂いを放出している手抜き料理に引き寄せられて、手を洗い、二階に駆け上がった瞬間…。
「あ、あんちゃん！！！！…ガっールフレン…ド…いたん？！――――きゃー！！！」
なんと言う早合点な妹なんだ…。コイツ理解が早いのは良いが、早合点の頻度と質の悪さに関してはピカ一だ。

「あのなぁ…。」
その声も虚しく、妹は階段を駆け下りて（※爆走の類だと思っていただきたい）親父に拳骨を食らっていた。
「へぇ…妹さんいるんだ…。」
「そーゆーお前はどうなんだよ。」
「想像に任せるわ。」
あー、こう言うこと言うやつに限って居ないんだったはず。まぁ、腹が減って仕方ないのでまずは食べてしまおう…って三笠のヤツ何時までこの家に居座るつもりだ？長々居座られる事の無いようにもなおさらダラダラさせてられない。奈帆もやって来たことだし。
「おい、もう食うぞ。」
《いただきまーす。》
あ、ハモッた。そのときの顔もなかなか見物だった。

食事が終わって皿を洗い終えると、三笠が聞いてきた。大概みんな良くも悪くも必ず聞いてくる。
「お母さんは？仕事？」
「奈帆が一才のときに死んだ。確かあれは事故だった…はず…。あれっ、十四年も前だとよく覚えていないもんだからなぁ…。」はっきり言って覚えてない訳が無い。あんな死に方されちゃぁな…。
「そうなんだ、ってことは家事とかは岸本がやり続けてるの？」
「そうだな～。少なくとも奈帆にだけは惨めな思いはして欲しくないからな。あのかわいそうって言う視線とかは特に嫌なもんだから。下手な同情ほど無駄なモンはないよ。」
あえて明るくそう言う。でなければとっくに鬱の始まり始まりだ。この類の話をしない事でもそうなる確率を大幅に減らしてる。十四年なんていうのはなかなかあっという間でもあると思うし、家事ってなかなか考え事を邪魔してくれるから、考え込まずにやってこれるというのもある。
「強いのね…。あたしはね六歳の時に両親が離婚して、どちらも

引き取る気ナシだったの。まぁ、愛されない子供って言うやつかしら？だから保護施設に入れられていたけどそれも去年で終わり。今一人暮らしで何とかやってるみたいな感じだし、中学生よりも前からのめりこむ物は本とアニメ、漫画だけ。中二病みたいな中二病ってやつで逃げてきた感じもあるかも。」

なかなかこいつも重い家庭事情があったようだ。長い黒髪と調度品のように調った顔からは想像できない。人間やっぱり見た目じゃ分からないものだ。なかなか面白いかも。すると三笠がおもむろに…。

「面白い話が聞けたわ。そろそろ帰るから。」

「送らなくて良いのか？」

「大丈夫よ、あたしの家はなかなか明るい通りにあるんだし、もし同学年の人に見つかったら変な騒ぎは確定物よ？」

「まあそうだが。年頃の少女を夜に一人で帰らせるというのは俺の信条に反する気がしてならない。」

「どんな信条よ。全く聞かせていただきたいわ。」

「そうか、なら二時間でも三時間でも話してやろうか。」

「さすがに遠慮しといてあげるけど、どうしてもって言うなら――。」

「じょっ、冗談だっ！」

冗談を本物と思われては困る。家の玄関までそんな話をしてたと思うと、壁一枚先の奈帆が盗聴してるのではという恐怖感に襲われた。だからなんだという話だけど。

「それじゃ。コーヒーはツケでね。」

お前にツケという概念なんか有ったのかと問いたい衝動を抑えてかろうじてため息で抑えた。

「じゃあな、ほんっと、次は客としてきてくれ。」

「さあね、あたしの気分によるわ。」

「よってもよらなくてもうちは客以外としては認識しないからな。」

「なーんだ。残念だわ。きっと女には優しいと思ってたのに。」
「思い込みはよしてくれ。」
「分かった事にしておくわ。じゃ、また明日。」
「会わない事を願う。」
「ひどいこと言うのね。」
「早く帰れ。」

こうして長い長い、そして面白い一日が終わった。

結局…、その2　まさかの避難行

三笠が帰った。
久しぶりに、
同年代の人間と…
話した気がする…。
何でだろうか…
久しぶりに…
心が笑った…。
まぁいいか、にしても、楽しかった。そう、楽しかったのだ。
「ゃん！あんちゃんっ！」
「わっ！なんだよ奈帆。」
パジャマ姿の奈帆が、俺の部屋で別途をバンバンしてる。
「でででで電気がつかない～。」
「電球切れたんじゃないのかよ。」
「家全部だのさ～。」
えっ？、だが待て、うちは光熱費全て滞納はしてないし、一度で全部の電球が切れるなんて聞いた事がない。まさかと思って、カーテンを開けて窓を開ける。しかしそこには信じられない光景が広がっていた。
「街が…、見えない…だと…？」
市街地丸々一つが暗闇に没していた。何があったんだと親父が部屋に入ってきた。そんなこと俺にも分かるわけないが、一応携帯で状況を調べてみた。
「ダムが決壊？どういうことなん？あんちゃん。」
「分からない、そもそもここら辺にダムなんかあったかな。親父、なんか知らない？」
「そいつは多分、戦時中に建てられた廃ダムだ。解体作業に来年から入る予定でまず、水を抜く予定だったはずだ。」

「そいつが決壊して変電所が浸水…。ついでにこの街も浸水、停電てことか。」
「あんちゃん、いっぱい光が寄ってくるよ。」
「本当だ、避難…するか？」
「高台の建物って、ここら辺以外あるんか。」
親父が珍しくごもっともな発言。
「山の神社とか小学校は？」
「ゴムボートで行けそうなのは神社かな。」
「じゃ、急ぐぞ。奈帆、お前は下の防災袋持ってこい。港、父さんとゴムボート出すの手伝ってくれないか？」
「わかった。」
奈帆が急いで防災グッズの詰った袋を持ってきた。一方このゴムボートは馬鹿みたいに重い。それでもなんとか一階の浸水箇所に浮かべる事に成功し、オールを引っ張り出した。モーターはこのボートには積んでいない。昔の大浸水の時の役所から配布されたものらしい。どうりでなわけだと一人納得して奈帆を乗せて、親父にも乗ってもらう、最後に俺も傾かないよう乗ってオールで漕ぎ出す。
「重い…。」
思わず呻いてしまう。それでも、親父が手伝ってくれたおかげで、一キロ先の神社まで数十分ぐらいで着く事ができた。親父の自慢の腕に感謝感謝だ。
「ふ～、着いたか。」
そこには既に沢山の避難している人がいた。神主さんとか巫女さんはせわしなく、毛布を配ったりして忙しい感じの様で大変そうだ。携帯で時間を見るともう午前0時だ。ボートを止めて境内に座って妹がどこか行かないように見守る。妹はお気に入りの漫画を読んで楽しんでいる。
「なんか持って来ればよかったかな…。」
ふと、あの中二少女？もはや中二とは呼べない三笠木葉を思い出す。

「アイツ…無事かなぁ。アイツなら無事だろう――――――――な。」

「無事じゃないわよ。」

急に現れた黒髪美少女のクレームに、俺の思考はＷｈｏ　ｉｓ　ｔｈｉｓ　ｇｉｒｌ？という台詞しか思い浮かばなかった。

「み、三笠…。」

呻く様に出た声に反応した奈帆が三笠を確認。さぁ、第一声は…。

「ガールフレンドの人…。」

あー、またも誤解を招くような…。今度一回しっかりと説明する必要があるようだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9922x/

中二病女と腑抜けな男

2011年12月29日09時57分発行